

「イエスの驚き ～百人隊長の“みことば信仰”～」

イエスがカペナウムに入られると、一人の百人隊長がみもとに来て懇願し、「主よ、私のしもべが中風のために家で寝込んでいます。ひどく苦しんでいます」と言った。イエスは彼に「行って彼を治そう」と言われた。しかし、百人隊長は答えた。「主よ、あなた様を私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。ただ、おことばを下さい。そうすれば私のしもべは癒やされます。と申しますのは、私も権威の下にある者だからです。私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。」イエスはこれを聞いて驚き、ついて来た人たちに言われた。「まことに、あなたがたに言います。わたしはイスラエルのうちのだれにも、これほどの信仰を見たことがありません。あなたがたに言いますが、多くの方が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。しかし、御国の子らは外の暗闇に放り出されます。そこで泣いて歯ぎしりするのです。」それからイエスは百人隊長に言われた。「行きなさい。あなたの信じたとおりになるように。」すると、ちょうどそのとき、そのしもべは癒やされた。マタイ福音書 8章 5～13節

イエスとローマ帝国の百人隊長との出会いです。その中でイエスは「驚いて」いるのです(10節)。

驚きにも色々ありますが、この驚きとは、「感嘆と称賛に値する驚き」を意味しています。この時のイエスの驚いている様子をイメージすることができるでしょうか。驚くほどに感心している表情、仕草、息づかい…。

この百人隊長は、イエスを驚かせるほどの信仰を持っていました。私たちも、そんな信仰を持ってみたいものです。

今回は、イエスの驚きと百人隊長の信仰を考えてみましょう。

イエスの驚き① しもべの心を持っている

百人隊長とは、「ローマ軍の背骨」と呼ばれ、戦場においても軍隊の訓練においても兵士を統率する重要な立場にあり、当時のローマ帝国の権威と力を象徴するような立場でした。

その百人隊長が自らイエスのもとに来て懇願するというのは、普通ではあり得ないことです*。ローマの支配下にあるユダヤ人に対して呼び付けて命令するのではなく、自らが出向いて懇願するのです。これは異例なことです。

しかも、この「しもべ」とは、奴隷のことです。奴隷とは、当時の社会の中で、家族同然のように扱われることもあれば、病気になって役に立たなくなればゴミのように捨てられる

こともありました。その生殺与奪は、主人の一存にかかっていた。奴隷の命は、まったく主人に依存しているのです。

そんなしもべのために懇願する百人隊長の姿は、まさに「しもべ」の姿です。自分に仕えるしもべを助けるために、自らがしもべとなったのです。衆目の中で、恥も、プライドも、見栄もなく、ただしもべを助けたいという一心からです。しかも、しもべを助けることによって自分が得る利益はありません。そこにあるのは損得ではなく、しもべに対する愛だけです。

イエスは、この百人隊長の姿に、十字架の心を見たのではないかと思うのです。それは、ただ愛するがゆえに「神としてのあり方を捨てられないとは考えず」（ピリピ2：6）に、しもべとなって十字架で命を捨てられたイエスの心です。

しかもユダヤ人ではなく、異邦人の百人隊長がしもべの心を持っていることにイエスは驚かれたのではないかと思います。

イエスが私たちの信仰を見て驚かれるとするなら、それは本来、しもべよりは主人になりたい、仕えるよりは仕えられたいと思っている私たちが、神を愛するがゆえに、隣人を愛するがゆえに、しもべの姿を取る時でしょう。

イエスの驚き② 恵みと信仰を知っている

百人隊長の懇願に対してイエスは、「行って彼を治そう」（7）と言われました。しかし百人隊長は「主よ、あなた様を私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。」（8a）と答えました。

百人隊長は、なぜ「資格はない」と言ったのでしょうか。前述したように、社会的には十分に力はあるのです。しかし資格はないのです。しばしば力と資格は混同され、力があれば資格もあると思いがちです。

現代において、人々が求めているのは「力」です。その「力」を手にする事で、資格を得ようとしているのです。その資格とは存在が「承認される」ことです。最近よく「承認欲求」ということばを聞きます。自分の存在が認められ、受容されることを求める心です。そのために人々は「力」を得ようとします。社会的な力、経済的な力、精神的な力、肉体的な力...、「力」があれば存在が承認される資格が得られると思っています。しかし「力」は、その資格を与えません。どれだけ「力」を得ても、現代人の承認欲求は満たされることはありません。

この百人隊長は、力は資格にはならないという事が分かっていたようです。ローマの背骨と呼ばれるほどの力があっても、異邦人である自分がイスラエルの神の恵みを受ける資格にはならないのです。自分には「資格がない」というのは事実なのです。

しかし、その自覚こそがイエスから神の恵みをいただく秘訣なのです。恵みを受けるのに必要なのは「力」ではなく「信仰」なのです。自分に資格がないと分かることが、信仰への道を開くのです。

恵みの世界とは正反対の、力で獲得する世界に生きている百人隊長が、信仰と恵みの世界

を分かっていることにイエスは驚かれたのだと思うのです。

私たちの存在が承認されることも同じです。承認される資格とは力によって得られるものではなく、恵みによって与えられ、信仰によって受け取るものなのです。

イエスの驚き③ イエスの権威を知っている

「ただ、おことばを下さい。そうすれば私のしもべは癒されます。」(8b)

この百人隊長の信仰に、イエスの驚きは頂点に達しました。「まことに、あなたがたに言います。わたしはイスラエルのうちのだれにも、これほどの信仰を見たことがありません。」(10)と云われたほどです。

百人隊長は、権威というものを理解していました。それは9節に記されているように、自らの実体験から得たものです。その理解とは、権威とは、上から下に流れるということです。百人隊長自身がローマ皇帝の権威の下にあり、また部下たちは自分の権威の下にいます。それは決して逆流することはないのです。権威者は、自身の権威の下にある者に対して権威を持っているのです。ですから、権威者のことばは、権威の下にある者に対して、権威を持っているのです。

そうすると、百人隊長が行くべきは、ローマ皇帝のもとであるはずですが、彼は、その権威のもとに居るのですから。しかし、彼が来たのは、イエスのもとでした。

ここでの驚きは、百人隊長が、権威について正しい理解を持っていたこと以上に、真の権威者が誰であるかを知っていたということです。

ユダヤ人であるならば、神のことばに権威があることは誰でも知っています。しかし、イエスのことばに、当時神の子と呼ばれていたローマ皇帝以上の権威、つまり真の神の子メシヤとしての権威があることは分かっていませんでした。

異邦人である百人隊長が、イエスがローマ皇帝以上の権威者であると認めていたことは、大きな驚きです。

みことば信仰とお方信仰

この百人隊長の信仰を、“みことば信仰”と言うことがあります。確かにイエスのことばを信じたのです。しかしよく見てみると、ただことばを信じたこと以上に、ことばを発しているお方を信じているのです。(お方という表現は、人格を有した存在であることを意味しています。)

そのことを想起させる注目すべきことは、百人隊長は一言も「しもべを癒してください」とは言っていないということです。「ただ、おことばをください。そうすれば私のしもべは癒されます。」(8b)と言ったのです。

「ただ、おことばをください。」とは、イエスがどのようなお方であるかを知っているからこそ言えることばです。この物語の直前の癒しの出来事と同じです。ツァラトに冒された者が「主よ。お心一つで私をきよくすることがお出来になります。」(マタイ8：2)とイエス

に言いました。ここでも、「きよくしてください」とは言っていないのです。それは、イエスはきよめてくださるお方であることを信じているということです。

百人隊長も同じです。イエスの人格を知っているのです。このお方が、何を大切に、何を願い、何を喜ばれるのか…、イエスのお心は、自分のしもべを癒してくださるに違いないと信じているのです。

私は、特に“みことば信仰”を強調する教団で育ちました。そのことにとっても感謝しています。ただ、その“みことば信仰”とは、正確にはみことばを発しているお方への信仰です。

これは実際に私が体験したのですが、ある一人の女性に複数の男性がプロポーズしました。それぞれが御言葉の示しを頂いているのです。しかし、確かなことは、少なくとも一人以外の他の男性の御言葉の示しは勘違いか間違いだということです。結局、一人もプロポーズは叶いませんでしたが…。もう30年近く前のことですが、その出来事を通してみことばが示されるとはどういうことなのかを深く考えさせられました。

ある場合には、「主よ、みことばを示したまえ」と祈りながら、えいっ！と聖書を開いたら、「ユダが首を吊った」という箇所が目にとまり、次にえいっ！と開いたら「あなたも行って同じようにしなさい」という箇所が示された、という笑えない笑い話があります。

ことばと、そのことばを発しているお方とを切り離してしまう時、その“みことば信仰”は、ともすると、ただの“文字信仰”になってしまいます。

時に、“みことば信仰”を強調しながらも、正しい御心から外れてしまい、極端な解釈や行動を取ってしまうことがあります。それは、ことばとことばを発しているお方とを切り離し、ことばを文字化してしまうからです。そうすると、みことばに対して熱心でありながらも、その熱心さが逆に神の御心から遠ざけてしまうという悲劇に陥ってしまいます。

大切なのは、そのことばを発しているお方との、人格的關係＝ことばの關係です。ことばをただの知識と情報を得るツールとして理解する”文字信仰“と、ことばを人格的關係の内実として理解する”みことば信仰“とは、似て非なるものです。

この百人隊長は、ことばの權威を理解していましたが、それ以上に、ことばを発しているお方を知っていたのです。そのお方を知っている“みことば信仰”なのです。

イエスは、百人隊長に言われました。「行きなさい。あなたの信じたとおりになるように。」

(13)

權威者のことばと、その權威の下にある者の信仰が結びついたとき、まさに「信じた通りになる」ということが起こるのです。その信仰とは、ことばを信じることはもちろん、そのことばを発しているお方を信じるのです。そしてさらにそのお方は、しもべを癒してくださるという恵み深きお方であることを信じるのです。

イエスを驚かせるほどの百人隊長の信仰とは、イエスがどのようなお方かを知っているということから生み出されたものです。イエスの十字架の心、イエスの恵み、イエスの權威、イエスが救い主だということ、それらが「ただ、おことばをください」という“みことば信仰”をもたらしたのです。

私たちは、イエスを驚かせるほどの信仰を持つことが出来るのかと考えましたが、分かる

ことは、むしろ、本来救われるべき資格を持たない異邦人である私たちを、ただ恵みによって救ってくださり、神のことばを与えてくださるといふ、この神の恵みに私たちの方が驚かされるのだということです。

*ルカ福音書7章3節では「ユダヤ人の長老たちを送った」と記されています。各福音書において記述の異なる箇所は他にも多々あります。それは、マタイにはマタイの、ルカにはルカの伝えようとしているメッセージがあるということです。ここでは、マタイの伝えようとしたメッセージを聴き取っていきたいと思います。記述の違いを無理に整合させる必要はなく、むしろ違いに込められた記者の意図を聴き取っていく時、聖書の世界はさらに豊かに広がっていきます。